

郭沫若研究会報

創刊号

(総 No.2)

2003年5月1日発行

日本郭沫若研究会事務局

〒810-8560 福岡市中央区六本松 4-2-1

九州大学高等教育総合開発研究センター武継平研究室

Tel&Fax(092)726-4651 E-mail: yanzipin@rche.kyushu-u.ac.jp

研究会ホームページ: <http://web.rche.kyushu-u.ac.jp/~guomoruo/>

目次

短編小説「鼠災」をめぐって(1)	岩佐昌暉
郭沫若と須和田の郷	斎藤喜代子
解釈するということ	藤田梨那
「反思郭沫若」から考えたこと	武 継平
詩の対訳コーナー	斎藤道彦・藤田梨那・武継平
会員研究活動報告	
お知らせ	

短編小説「鼠災」をめぐって(1)

郭沫若の小説については、中嶋みどりの「郭沫若の小説一九二〇年代を中心に」(『入矢教授・小川教授退休記念中国文学語学論集』筑摩書房、1974)が周到な考察を加えており、またそれを踏まえて書かれた武継平『異文化の中の郭沫若—日本留学の時代』(九州大学出版会、2002年12月)「第八章 小説創作の試み」における考察がある。この二つが郭沫若の小説を考えるさいの基本文献とっていいものである。

かなり乱暴な要約だが、中嶋さんの説では、郭沫若の二十年代の小説には二つの系列がある。一つは「伝奇的物語」、もう一つは「私小説的作品」「身辺小説」の類である。その「原型」といいいい作品が、前者では「牧羊哀話」、後者では「鼠災」だという。これに対し武さんは、こういう腑分けを認めた上で、後者の「原型」は「鼠災」より早く書かれた「かれ」という作品だと主張している。私は今度「鼠災」(『全集』文学編9巻所収、1920年1月10日執筆、1月26日『時事新報』副刊「学灯」発表)を読んでみて、どちらかといえば、結論は、中嶋説に荷担したい気がした。

私の要約では、「鼠災」は、日本の「某国立大学」「医学部」の中国人留学生・方平甫と、彼の日本人妻との生活の断片を描いたものである。方平甫が大切にしていた冬服が鼠に齧られ、着られなくなったことから、服を管理していた妻への不満がふきだしてきて不愉快になる。その主人公の不機嫌な気持ちの描写が作品のすべてである。これは後で書くつもりだが、不如意な生活とその中での余り人目にさらしたくない歪んだ心理を直叙している点で、郭沫若のその後の「私小説的作品」「身辺小説」の原型といいいいと思った。それに対し、「かれ」という作品は余りにも短かすぎ(250字しかない)、このままでは「伝奇物語」と「身辺小説」のどちらの方向に発展していくか判断がつかない、つまり両方の要素を併せ持っていて、どちらかの「原型」と決めるのは難しいと思った。この点については、私としては今後この資料にもとづいてもっといろいろな方の意見を聞いてみたいと思うが、以上のことから「結論」中嶋説に傾いたのである。

だが、「結論」に至る点では、私は中嶋説に欠陥があることに気付いた。中嶋さんはとんでもない思い違い、あるいは誤読、をしているのである。彼女はこう書いている。

「原型はもうひとつある。これも最も早い時期の、しかしいま「文

集」におさめない「鼠災」なる小説について沫若はのべている。それはゲーテの「ファウスト」の訳稿をねずみにかじられ、二か月の労苦が烏有に帰したことをかいた作品だという」。

中嶋さんはなぜこういうことを書いたのか。理由は単純なことで、中嶋さんがこの論文を書いた時点で目にできた最も完備した資料は『郭沫若文集』であり、『文集』には「鼠災」は収録されておらず、「鼠災」という作品を読むことができなかつたのである。だから「鼠災」を読まずに書いた、ということは中嶋さんの怠慢ではない。強いて言えば時代の限界だったというほかない。中嶋さんがこの個所を「創造十年」の当該の個所には確かに苦心して翻訳した「ファウスト」の原稿を鼠に齧られたことが書かれてはいるが、「不幸我又遭着了一次“鼠災”」とあるだけで、その話を「鼠災」という作品にしたとは書いていない。その読み違い（中嶋さんほどの人がこんな単純な誤読をするはずはないので、私は何かの思いこみによる間違いだと考えるのだが）が、こういう誤った記述を生んだのである。もう一ついけないのは、郭沫若自身が「鼠災」について「創造十年」に次のように書いているのを見逃した点だった。

『学灯』に詩稿を投稿していた時分に、僕は一二篇の小説も送った。『鼠災』と題した一篇は、僕の一張羅のセルの学生服を角の破れた柳行李に入れていたのを鼠にかじられ、僕とアンナと言い合いをした話を書いたものである。その全篇に用いたのは心理描写で、頗る暗澹たる書き方をしており、前の『羊飼いの哀話』や火葬にした『髑髏』に比べると、一段の進境を見せた創作だといえよう。」（松枝茂夫訳）

中嶋さんはその説を立てるにあたって、小説が「日常的な生活の断片」を作品化したかどうか、ということ基準にしているため、「鼠災」の内容を取り損なっているにも関わらず論文の要旨・結論を修正する必要は生じていない。だが、もう少し気をつけて資料を読まればもっと完善な論文になったのにと残念な気がする。話がだんだん逸れていくが、私の本意は中嶋さんを非難することにあるのではない。私もかつて九州大学の紀要に書いた文章で全くの思いこみからとんでもない間違った記述をしたことがある。だから中嶋さんほどの細心の研究者がこういうミスを犯されることにも、多分何か思いこみがあったに違いないと納得する思いこそすれ、非難する気持ちは全くないのである。本論に入る前に紙数が尽きた。（待续）

（岩佐昌暲）

郭沫若と須和田の郷

職を退いて、ここ須和田の郷に居を移してから3年になる。千葉県市川市須和田2丁目、いわずと知れた郭沫若亡命の地である。はるか遠い学生時代、中国近現代文学を学んだ際に、郭沫若ゆかりの地であるということで一度だけ訪れたことがあったが、いまやそこが自分の終焉の地となったということに一種の奇縁を感じる。

郭沫若が10年の長きにわたる(1928-1937)亡命生活を送った旧居の地番は、もと東葛飾須和田267番地、いまは市川市須和田2丁目3-14と改められ、わが草舎とは咫尺の間にある。しかしその南向きの日本式木造の家はすでに荒れ果て、彼が愛した小さな庭の草木もことごとく枯れ果てて、あの苦渋に満ちた生活環境の中で、中国古代社会研究に没頭したありし日の郭沫若をしのぶよすがは今はない。ただ人の出入を禁じた一枚の札だけが空しく打ち付けられているのみである。

その旧居を北東に7、8分歩いたところに須和田公園がある。そこは古くは須和田台地と呼ばれ、弥生時代における小判型の竪穴住居跡が発見された所でもあるが、その公園の一角に郭沫若の詩碑がある。この碑の由来については、1955年12月5日、郭沫若が中国学術文化視察団団長として来日した際、彼が須和田の旧居を訪問したことを記念して、1966年、市川市が友好のしるしにと建立したものである。

詩碑は黒の御影石、高さ1.5メートル、幅2メートル、正面に郭沫若の筆になる「別須和田」の詩が刻され、右側には彼の半身像レリーフが嵌め込まれている。

2月は梅、3月桜、5月に薔薇、6月の紫陽花、7、8月の蝉しぐれ、9月には萩、そして10月、この時須和田台地はことごとく銀杏の黄一色に染め上げられる—「別須和田」の詩碑はそんな佇まいの中にある。

詩は5言の長詩、34句よりなる。ところでこの詩はどのように読まれているのだろうか。すでに須田禎一氏による名訳があるが(1972、未来社刊『郭沫若詩集』)、詩の末尾の「別矣須和田」の語は、果たして須田氏の訳のごとく「さらばなつかしき須和田よ」(傍点筆者)と解するのがよいかどうか、いささか気になるのである。要するに郭沫若にとっての須和田とはどういう所であったかという問題である。なつかしき須和田であったかという問題である。それには、この地に

おける彼の亡命 10 年という複雑な生活環境を丹念に見つめ直す必要があろうし、また彼の詩作の形態をも研究しなければならないだろう。たとえば「別須和田」に先行する詩に「留別日本」があるが、これは 1923 年 4 月、郭沫若が 10 年の日本留学を終えて帰国したときのもので、その詩の末尾が「永別呀、邪馬台的兄弟！」の語で結ばれており極めて類似している。しかも両詩ともそれぞれ末尾の句をもって詩題としている点等々である。

中国近世文学研究にたずさわるわたしは、あの怒濤のごとき中国近代文学へ切り込みようなど全く心得ぬ文字通りの門外漢ではあるが、たまたま居を郭沫若亡命の地に置くということで研究会に参加させていただくこととなった。郭沫若にとってのここ須和田とはどういう所だったのだろうか—ともあれ、その須和田の郷は、いま花のなかにある。（斎藤喜代子）

解釈するということ

郭沫若研究を始めてまだ五、六年しか経っていないが、彼の作品をどう読むべきかは、私にとって常に問題であった。郭沫若が私の祖父であるということもあって、確かに時と場合によっては複雑な感情が絡んで来ることもなきにしもあらず。しかし多くの場合は作品をいかに分析するかが問題である。

中国ではつい最近まで、革命的ロマン主義、マルクス革命思想など、所謂主義思想の物差しで彼の作品を見てきた。この見方でいくと、作家の感情表現や表現のテクニックを正確に捉え、評価することが出来なくなる。最近中国の学者たちもこの問題について大いに反省するようになった。例えば、マルクス主義で郭沫若を分析するとき、問題提示において勢いマルクス主義の正しさ、郭沫若のマルクス主義に対する傾倒を盛り込んでしまう。以後の分析はすべてこれを証明する方向で行なっていく。結論はまた大前提に戻って来ておしまいになる。言わば結果の分かった問題に始まり、結果に戻る、堂々巡りである。これでは文学研究の前進が有り得ないと、彼らは反省する。このような反省を踏まえて、彼らは郭沫若における中国古典文学や思想の存在に目を向け、多角的に、より客観的に郭沫若にアタックするようになった。なかなか良い傾向だと思う。

最近私が最も注目した研究者は、南京大学の朱寿桐という方である。この若き研究者の研究方法はいままでのそれと全く違う。東西の古典

哲学を踏まえ、心理学の手法を駆使し、作品から情緒を引き出して、作品の核心に迫り、作品評価を行なっている。彼の創造社研究はこれまでの研究の枠を打破し、新しい可能性を示している。ここに彼の著書の一つをお示ししよう。『情緒—創造社的詩宇宙』（朱寿桐著、上海文芸出版社）は出色の一冊である。

さて、日本に目を転じてみよう。これまで考証的あるいは解釈的研究や翻訳は魯迅研究と比べて、数はずっと少ないが、先行研究として教示を受けるものは多数ある。しかし気になることもある。郭沫若文学を主義思想の代わりにある文学理論に縛り付けて、こうでなければならぬという見方である。そもそも詩人や小説家はある文学理論を（実行するために作品を書くのではないはず。創作の動機は作家の体験、社会的背景、作家の人生観に左右されてそれぞれ違うが、創作された作品が理論や思想だけを表現、あるいは提唱するものではない。作者の理念を表現すると同時に、作者の情緒、美的感性をも反映する。理論があつて作品があるわけではない。日本留学時代の郭沫若は西洋の哲学や文学、文学理論に接し、大いに栄養を吸収した。『女神』中の詩歌は西洋文学や文学理論から吸収したさまざまな要素を内包している。しかし『女神』の生命は詩人の感性と情熱にあり、それは如何なる既成の理論や体系の濾過をも許さないものである。果たして郭沫若、特に日本留学時代の彼に体系的な文学理論を求めることができようか。この問題に関しては、私は大いに朱寿桐氏の視点に賛成である。

この度、日本郭沫若研究会が創立された。私にとって、これは研鑽を積むによい機会であり、場である。これからは多くの研究者と出会い、意見交流をし、先輩の先生方のご教示も頂きたいと考える次第である。（藤田梨那）

「反思郭沫若」から考えたこと

最近、半年前に北京の某「地攤儿」で購入した『世紀末的魯迅論争』（高旭東編、東方出版社 2001 年 10 月）と『反思郭沫若』（丁東編、作家出版社 1999 年 3 月）を読んでいる。紙は上質だし、装丁もいい。

「地攤儿」で買ったとはいえ、内容の改竄がよくある海賊版とは明らかに違う。20 世紀の最後の年に、2 人の現役作家と一部の気鋭な若手研究者たちが「魯迅挑戦」と「郭沫若挑戦」の旋風を巻き起こしたことは知ってはいたが、彼らの論文を読むのははじめてである。前者の『世紀末的魯迅論争』は 5 人の挑戦者対 28 人の魯迅防衛者（著名

な中国現代文学研究者は勢ぞろいである)との戦いだから、論戦というよりむしろ本の編集者が仕掛けた殲滅戦という印象が強い。数十年にわたる魯迅研究の平静を破ったのは挑戦者たちの殴り込みのような挑戦だが、過激な発言とは裏腹に、問題提起も鋭い。魯迅研究の金城湯池に敢えてアタックする彼らの懐疑精神がこれからさらに踏み込んだ学術論争を引き出すことを期待している。

ところが、もう一冊の『反思郭沫若』は史料の真偽をめぐる論争を除いて、「学術存疑録」と「反思群言堂」の章に収められた 23 編の論文はまるで郭沫若の人格、文学及び史学上の功績に揺さぶりをかける檄文のようなものだ。「暮年心路記」(丸山昇氏の論文「郭沫若と蕭乾」もここに収録されている)は建国後の郭沫若の横顔を比較的冷静に捉えているが、「郭沫若在 1966 年」や「郭沫若在文革後期」のような随筆風に書かれたものは、60 年代の中国共産党指導部の権力闘争を背景に毛沢東に対する追随による郭沫若の人格の失墜を暴いたものものの、極秘のはずだったそれらの詳細情報を一体どういうルートで入手したのかなど、文中暴露されたこと自体が真実かどうかに関わる情報源が一切明らかにされていないので、学術的な価値は判断しにくい。

しかし、面白いことに、『世紀末的魯迅論争』と異なって、「郭沫若挑戦」に対する反論はいまだに見ない。『反思郭沫若』には過激な表現が随所に見られるが、挑戦者たちが注目しているのは事実上 90 年代までの「郭研」の未踏の地だと言わねばならない。今年の 11 月に北京で開かれた「郭沫若と百年中国学術文化国際フォーラム」で従来郭沫若を讃える「郭学研究」と新たに現れた「郭沫若挑戦」とのコントラストがあまりにも著しいことと、挑戦状が叩き付けられた今大いに論争すべきだという声があった。これからどんな方向に発展していくのかを見守りたい。

思うに、もし今までの郭沫若研究には禁止区域が存在していたならば、その研究自体が決して健全とは言えないのである。一方、日本における郭沫若研究にも問題がないわけではない。早くも 20 年代初期から中国文壇における彼の存在が日本でも注目されていたが、本格的な研究は 70 年代に入るとほぼ全面的に挫折してしまった。われわれはそのきっかけとなった 1966 年「焚書」爆弾発言を本当に理解しているのだろうか。30 年代日本亡命中幅広くそして数多くの日本人と付き合っていたにもかかわらず、彼は一生それらのことに触れようとしなかった。それは何故か。われわれにとって、1937 年 7 月日本を

脱出した以降の郭沫若は謎だらけである。抗日戦争時の彼、新中国誕生後の彼、そして文革中の彼については、われわれはほとんど何も知らない。

魯迅が亡くなった後、郭沫若は中国現代主流文学の代表であり続けてきた人物である。これは否めない中国の現代文学史である以上、とくに「郭沫若再認識」の問題が表面化した今日、われわれ中国現代文学の研究者はどうして郭沫若研究を棚上げにすることが出来よう。

(武 継平)

詩作品の対訳コーナー

詩作品の対訳コーナー

(文責 訳者)

『女神』序詩

我是个无产阶级者：
因为我除个赤条条的我外，
什么私有财产也没有
《女神》是我自己产生出来的，
或许可以说是我的私有，
但是，我愿意成个共产主义者，
所以我把她公开了。

《女神》哟！
你去，去寻那与我的振动数相同的人；
你去，去寻那与我的燃烧点相等的人。
你去，去在我可爱的青年的兄弟姊妹胸中
把他们的心弦拨动，
把他们的智光点燃吧！

僕はプロレタリアだ
なぜなら僕には裸身の僕以外
どんな私有財産もないからだ
『女神』は僕自身が産み出したものだ
あるいは僕の私有物だと言えるかもしれない
しかし僕は共産主義者になりたい
だから僕は彼女を公開した

『女神』よ！
行け、僕と振動数の同じ人を尋ねに
行け、僕と燃焼点の等しい人を尋ねに
行け、僕の愛する若き兄弟姊妹の胸の中に
彼らの琴線を揺り動かし
彼らの知の光をとますのだ！

—1921. 5. 26 作 (『女神』より)

(斎藤道彦 訳)

日の出

哦哦，环天都是火云！
好像是赤的游龙，赤的狮子，
赤的鲸鱼，赤的象，赤的犀。
你们可都是亚坡罗的前驱？

ああ、満天の火のような雲！
真っ赤な龍、真っ赤な獅子、
真っ赤な鯨、真っ赤な象、真っ赤な犀。
君らはアポロの先導者か？

哦哦，摩托车前的明灯！
你二十世纪的亚坡罗！
你也改乘了摩托车吗？
我想做个你的助手，你肯同意吗？

ああ、オートバイの前照灯！
君、二十世紀のアポロ！
君もオートバイに乗り換えたのか？
私は君の助手になりたい、いいかしら？

哦哦，光的雄劲！
玛瑙一样的晨鸟在我眼前飞腾。
明与暗，刀切断了一样地分明！
这正是生命和死亡的斗争！

ああ、光の力強さ！
瑪瑙のような鳥が目の前を飛び回る。
明と暗、一刀両断のように明らかだ！
これはまさに生と死の戦いだ！

哦哦，明与暗，同是一样的浮云。
我守看着那一切的暗云……
被亚坡罗的雄光驱除干净！
是凯旋的鼓吹呵，四野的鸡声！

ああ、明と暗、ともに浮雲。
私はすべての暗雲を見守って……
あれはアポロの強い光にすっかり追い払われた！
凱旋の吹奏よ、四野の鶏の声！

—1920.3作（『女神』より）（藤田梨那 訳）

梅下の酔い歌

—日本大宰府を遊ぶ—

梅花！梅花！
我赞美你！我赞美你！
你从你自我当中
吐露出清淡的天香，
开放出窈窕的好花。
花呀！爱呀！
宇宙的精髓呀！
生命的泉水呀！
假使春天没有花，
人生没有爱，
到底成了个什么世界？
梅花呀！梅花呀！

梅の花！梅の花！
私は君を讃える！私は君を讃える！
君が自らの自我より
清らかな香りを吐き出し、
美しい花を咲き出す。
花よ！愛よ！
宇宙の神髓よ！
命の泉よ！
もし春に花なく、
人生に愛なくんば、
何たる世界になり果てるや？
梅の花よ！梅の花よ！

我赞美你！

私は君を讃える！

我赞美我自己！

私自身を讃える！

我赞美这自我表现的全宇宙的本体！

この自己表現の宇宙そのものを讃える！

还有什么你？

この上更に君が必要か？

还有什么我？

更に私が必要か？

还有什么古人？

更に古人が必要か？

还有什么异邦的名所？

更に異邦の名所が必要か？

一切的偶像都在我面前毀破！

一切の偶像は私の前で碎けていく！

破！破！破！

碎ける！碎ける！碎ける！

我要把我的声带唱破！

喉が破れるまで私は歌い続けたい！

—1920.3.30 作(『女神』より)

(藤田梨那 訳)

割れたガラスのコップ (佚詩)

我在青春的时候，
摘了一枝紫色的草花，
配了一皮浓厚的青草。
供在这个破了的玻璃杯中，
花草底精神是好！

私は若かったころ、
紫色の草花を一本摘み、
青々とした若草を添えてあげた。
この割れたガラスのコップの中に生けられ、
花も草も本当に元気だった！

花离了根，
草离了本，
破了的玻璃杯，
怎么把水装得饱？
莫有一夜的工夫，
花已憔悴了，
草已枯死了。

花は根から離れ、
草はもとから離れ、
割れたガラスのコップは
どうして水を一杯蓄えられよう？
一晩も経たぬうちに、
花はすっかり萎れ、
草も枯死してしまった。

窗外的凄风夜雨，
助涨我泪湖里的波涛。
死了的花魂草魂
还在我面前缭绕。
我守着这个破了的玻璃杯
饱尝着——
忏悔的清羹，
寂寥底滋味，
悲哀底烹调。

窓の外は冷たい風と夜の雨、
私の涙の湖は波が高くなってきた。
死んだ花と草の魂は
今でも目の前を漂っている。
私はこの割れたガラスのコップを
見守りながら
懺悔の清らかな汁を吸り、
寂しさと
悲しさをつぶさに味わわされている。

—1919. 11. 6 作(1920. 2. 4『時事新報・学燈』より)

(武 継平 訳)

会員研究活動の近況：

- ☆ 現在進行中の訳業—『桜花書簡』（郭沫若）唐明中・黄高斌編注 1913～1923 年家信選 四川人民出版社 1981 年。これは故郭沫若先生が第一次日本留学中に書かれた十年間の貴重な家信ですが、「郭沫若全集」には収録されておりません。先生は第一高等学校予科で日本語を習得、次いで第六高等学校に入学、続いて九州大学医学部に進学されました。各行に先生の多様な思想の萌芽が視えています。ただ、先生は胡適の「文学改良芻議」（1917 年）に捉われずに、当時の文語と白話を表現性豊かに使用されました。そのため、文意が必ずしも平明ではありません。日本語訳がその理解を些かでも容易にするようにと、周知の中堅研究者である藤田梨那さんと武継平さんの献身を得、三者の合作として訳業を進めています。（大高順雄）
- ☆ 中国郭沫若研究会の最新動向：同研究会正副会長の林甘泉、蔡震（中国社会科学院所属）を中心とする新しい『郭沫若年譜』作成グループが近日発足し、これから資料の収集と整理の作業に取りかかるということです。在日留学の十年のことに関しては当会武継平の著書『異文化のなかの郭沫若』（九州大学出版会 2002. 12）が一部の史料を提供することができると思っています。亡命の十年に関しては不明な点が多いので資料の提供を方々に呼びかけています。（史料の提供を希望する会員がいらっしゃるなら、資料を一旦研究会事務局に送っていただき、提供者記名の形でまとめて中国側に提供したいと考えています。よろしく願います。）（事務局）
- ☆ 昨年 11 月の北京の「郭沫若と百年中国学術文化国際フォーラム」での発表原稿を書き直して紀要に発表しました（「福岡滞在期の郭沫若文学の背景その他」九州大学言語文化研究院『言語文化論究』17 号, 2003 年 3 月刊）。抜刷りご希望の方はご連絡下さい（メール可）。（岩佐昌暲）
- ☆ 藤田梨那会員の新作論文「＜鶏の帰去来＞論」が 2003 年 4 月発行の国士舘大学『漢文学紀要』に掲載されました。郭沫若が日本亡命中に書いた「鶏の帰去来」は身边小説の体裁を取っていながら、実は昭和 30 年代日本における朝鮮人労働者の問題を書いた社会小説です。留学時代から持ち続けた朝鮮への関心はこの頃になってむしろ情緒的な捉え方から客観的、分析的な捉え方へと

変化しました。具体的なデータや分析によって、日本の対朝鮮政策に不満を表しています。朝鮮問題に対する認識の深化を示めす一編です。（藤田梨那）

- ☆ 日本現代中国学会西日本部会春季研究集会在4月19日（土）午後西南学院大学にて開かれました。武継平会員が「郭沫若の『女神の復活』と魯迅の『不周山』」を題に研究報告を行いました。同一神話伝説から取材した魯迅の『不周山』との比較を視野に入れ、作品の成立、創作の意図、神話原典との関係、ストーリーの構造などの面から『女神』の一部である『女神の復活』を複眼的に論じ、作品の演劇性という新視点から表題の深意の解釈にアプローチする一方、作者言説の非論理性を指摘しました。同論文は九州大学『言語文化論究』18号（学府関連特別号）に掲載される予定です。（事務局）
- ☆ 小崎太一会員はこのごろ「五四時的郭沫若」を題とする中国語の文章を本人のHPに載せました。pdf版とhtml版両方あるので、簡体字フォントを導入してこちらをご覧ください。
http://www002.upp.so-net.ne.jp/zhao_kozaki/taichi/yanjiu/guo_moruo/hanyu.html （事務局）

事務局からのお知らせ：

当研究会事務局が所在する「九州大学教育研究センター」という名称は4月1日より「九州大学高等教育総合開発研究センター」に正式に変更されました。改めてお知らせいたします。今後事務局宛の書簡は新しい名称をお書きになるようよろしくお願い申し上げます。

注： 表紙の題字はコンピューター処理をした郭沫若の書
を使っています。